

新除草・調節剤

レナパック

P L 除草剤

(取扱メーカー) 丸和物産株式会社
北興化学工業株式会社

対象作物; 移植および直播ビート

性状・作用特性; 本剤は、レナシル(3-シクロヘキシル-5, 6-トリメチレンウラシル)を40%、PAC(1-フェニル-4-アミノ-5-クロルピリダゾン-6)を30%含む水和性の混合剤である。ビートに選択的に安全性の高い除草剤として、定植活着後処理が昭和44年度より普及されているが、直播ビートの本葉2~3葉期処理についても45年度より実用化となった。本剤は、レナシル、PACの特性を相乗的に作用させ、雑草に対する有効範囲を拡大し、除草効果を高めたものである。対象雑草は、畑地一年生イネ科・広葉雑草で、例えばハコベ・アカザ・タデ・イヌビエ・ナギナタコウジュ等である。

本剤に非イオン表面活性剤を加用すると、雑草に対して接触吸収作用が増し、生育中の雑草をも枯死させることができる。

土壌中の移行性は小さく、また安定した物質で、分解し難く効果の持続期間も極めて長い。

毒性; 本剤の動物に対する急性経口毒性は、ラットで $LD_{50} = 11,000 \text{ mg/Kg}$ (レナシル)、 $LD_{50} = 3,600 \text{ mg/Kg}$ (PAC)であり、魚類の稚ゴイで $TLM(48 \text{ 時間}) = 110 \text{ ppm}$ 以上(レナシル)、 $TLM(48 \text{ 時間}) = 20 \text{ ppm}$ 以上(PAC)で、普通物である。

使用方法; 移植ビートの場合、定植活着後10アール当たり200~300g、直播ビートで

は、本葉2~3葉期200gを100ℓの水に溶かし、非イオン表面活性剤150~200ccを加えてよく混ぜ、加圧噴霧機で全面均一に散布する。いずれの場合も、雑草発生初期に散布することになるが、雑草生育期に処理する場合には必ず表面活性剤を加用すること。

セルビーン水和剤

S L D - 695 除草剤

(取扱メーカー) 石原産業株式会社

対象作物名; 小豆・菜豆

性状・作用特性; 本剤は、C1-IPCとリニュロンの混合剤でC1-IPC(17.5%)・リニュロン(7.5%)の混合比を持つ水和剤である。

C1-IPCは成分5~7g/aを必要とし、リニュロンは成分1.5~2g/aを必要とする。これに比し、本剤は成分としてC1-IPC 3.5~4.2g/a並びにリニュロン1.5~1.8g/aで各単剤に比し極めて良好な除草効果を示し、薬害はより少ない。

毒性; 両剤とも普通物で、動物に対する急性経口毒性は、ラット $LD_{50} = 3,800 \sim 5,000 \text{ mg/Kg}$ (C1-IPC)、 $LD_{50} = 3,500 \text{ mg/Kg}$ (リニュロン)であり、魚類のコイで $TLM(48 \text{ 時間}) = 10 \text{ ppm}$ (C1-IPC)、 $TLM(48 \text{ 時間}) = 80 \text{ ppm}$ (リニュロン)である。

使用方法; 小豆・菜豆に対し使用でき、主たる対象雑草はオオイヌタデ・ハコベ・シロザ・タデ類等畑地広葉一年生雑草であり、使用時期・使用量は小豆・菜豆の播種後~発芽前にかけて製品として20~24g/aを10~15ℓの

新除草・調節剤

水に稀釈し、均一懸濁液として土壌表面に均一散布する。

使用上の注意；C I - I P Oと同様に気温20℃以下が望ましいので、高温時はさける必要があり、寒地に適する。処理時期は、作物の播種後～発芽前であるが、除草効果の上からは発芽期に近いほど有効である。また、播種深度が極端に小さい場合は、発芽前でも薬害を生ずることがあるので、使用をさけること。

セレクト水和剤

C M P T 除草剤

（取扱メーカー）三井東圧化学株式会社

対象作物；小麦・二条大麦（いづれも多株穴播を除く）（畑作麦・水田裏作麦）

性状・作用特性；本剤は、チアゾール系の除草剤で、その主成分として、5-クロロ-4-メチル-2-プロピオンアミドチアゾール50%を含む水和剤であり、麦類の生育期に茎葉処理して、麦類に害なく、広葉雑草はもちろんのこと、スズメノテッポウ・スズメノカタビラな

どのイネ科雑草も選択的に枯殺する効果がある
本剤の土壌移行性は小さい。

毒性；人畜および魚類に対する毒性は極めて低く、急性経口毒性はマウスLD₅₀ = 2,080 mg/kgであり、魚毒性はT L M（48時間） = 31 ppmである。

使用方法；広葉雑草の優占畑作地帯では、広葉雑草の発生盛期より4葉期までに、またスズメノテッポウなどの優占水田裏作地帯では、スズメノテッポウなどの発生盛期より2葉期までに、製品量400～800gを10a当たり70～100ℓの水にうすめ、雑草の茎葉に充分かかるように、全面散布する。

使用上の注意；本剤は土壌処理効果がないので、雑草の発生前に散布しても効果がないため、発生前に散布しないこと。また、散布直後に大雨があると、除草効果が低くなるので、天候に注意して散布すること。なお、土壌水分の高い状態で散布すると、麦類に葉先枯れなどの薬害がでることがあるので、湿害の多発するような地帯では、充分に注意すること。

編集後記

山野の雑草や樹木も色づき、一面に紅葉のスクリーンをくりひろげる。

本号には、新潟県農業試験場伊藤四郎氏より「カキの摘果剤」、九州農業試験場野田健児氏より「休耕田と雑草対策」について貴重な原稿をいただき、掲載いたしました。

発刊にあたり、各位に対し謝意を表するとともに、今後ともご指導賜わるようお願いする。

財団法人 日本植物調節剤研究協会

東京都港区芝西久保桜川町26番地

電話 東京(03)502-4188(代)

昭和45年10月発行

第4巻第6号

¥70(送料35)

編集人 日本植物調節剤研究協会会長 河田 党

発行人 植調編集印刷事務所 広田 伸七

東京都港区芝愛宕町1-3, 全国農村教育協会内
発行所 植調編集印刷事務所

電話 東京(03)436-3388番